

過にもなり候はゞ、盛り氣つよく、手に喰付よふに成其時分籠を外庭へいだし、虫にて引出し、是も座敷と庭との違ひにて、座敷のよふには手なれずよし、是も日々相馴候ばれんにつけ候節庭江引出し、不舞して虫にて籠に入、度々一ツ事宛仕込候へば、自然と舞上り、暫くも舞也總て舞下る折ばれんを見せ候得ば、其所直ぐに下る也、右の通舞せ候事、度々は惡敷、一日に朝と晝後二度程宛舞候事、盛氣ぬけ候得ば、ばれんにも不添、方々舞下るよし、春の内盛り廿日計り舞候事、子飼は鳶鳥におち氣有り、思ふ儘に仕付不相成もの也、野鳥にて七年已上飼置たる鳥ならでは、仕込がたきのよし、日數廿日餘も仕込方取懸り、是のみの仕事に致仕付候よし、中々もつてしまいり兼る仕よふ也、まづあらまし聞傳へし事を記す、

〔飼鳥必用〕告天子。

此鳥唐人持渡し鳥にて、唐の雲雀也、日本の雲雀より格別大形、頭少し平み、府合薄赤、墨色にて首に自輪の府有り、足の跡爪鳥の鳥に同じ、地鳥にてひばり籠に入てよし、天明の比、琉球國より相渡候得共、啼音を不聞、唐にては此鳥にて會を催シ、啼かち候を上ときわめて、鳴ませたるを勝の方へ渡し候よし、聞傳へし、一體鳥の様子雲雀に似たり、

〔飼鳥必用〕雲雀

此鳥野方の鳥は黒斑也、砂場の鳥は赤斑也、尤所々よりも出る也、但し雌雄見分の義は、ひかへの爪長くそりなきは雄也、雌は少しそりあり、子の雌雄も右の處にて見分る也、勿論子飼は諸鳥のまねをするゆへに人々きろふ也、荒鳥三年過たる至てよし、

りう雲雀。一名大雲雀と言

此鳥駿府より出る、荒鳥を取、三年ほど飼へば宜しく鳴也、尤鳴方常の雲雀より大口也、飼飼鈔にて三分餌也、